

不思議な物語

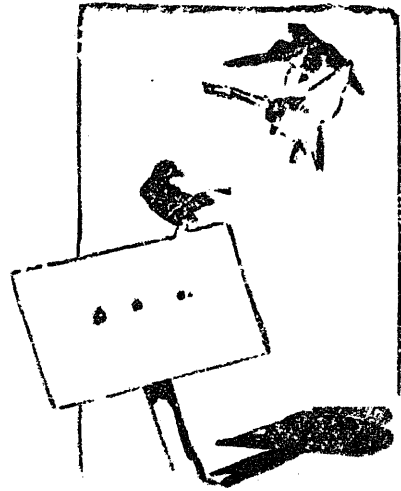
太田龍東譯

第三、怪物の話

漁夫の正太郎は怪物を壺中に入れて次のやうな話をして聞かせました。

ベルシヤ國の内にツーマンと云ふ國がありました

て、この國の王様は一代治らない悪い病に苦しめ



られてゐました。どうかしてこの病を治したいと思つて國內のあらゆる名醫に治療を受けましたが少しも効はありません。それで臣下の人々が相談して何かよい工夫はあるまいかと考へてゐますと一人の役人が「世界中に告示して名醫を集め其中選んだらよい醫者が得られやう」と申します。これはよい工夫だから早速廣告せうと云ふので世界中に廣告しました。すると澤山の醫者がすぐ集りましたので、其中五六人を撰んで王様の病氣を診察させますと、今迄醫者の見たこと、少しも違ひはありませんから皆が落膽してゐますと、一人の若い醫者が遅れて來りまして、「この病は私が直ぐ治療する」と云ひました。皆は不安心ながらこの若い醫者に任せることゝしたのです。

こゝで一吋この醫者のことを云つておきますが

この醫師はギリシヤ國の人で名を藤堂と云つて醫學の方にかけては中々の名人であります。この醫師は早速王様に面會して、

「王様は永々の御病氣で御心配成されたで御座いませう、これから私が療治いたしますから御安心成さい、私の治術は他の醫師とは違ひまして服薬も用ひず直ちに全快させます」

と云ひますと、王様は喜んで

「汝が朕の難病を遠ひなく全癒せしめたなら、一代富貴の身とし高い位に昇らしてやるから、早くこの病を癒してくれ」。

と頼みますので醫師は

「承知いたしました。それでは明日道具を整へて療治に伺ひます。」

と答へて其日は退りました。

翌日醫師藤堂は王様の所へ伺候して云ひますには

「陛下御馬に乗り玉遊び成さいます。」

王は藤堂の云ふがまゝに馬に乗り玉突場に出ます

と、醫師は用意して置いた一本の竹を示し、

「陛下この竹で玉遊成さい、さうしてこの竹には

妙薬が仕込んでありますから、其御考へで玉体の

疲れるまでお遊び給へ」。

と申しますと、王はその竹を以て玉突を爲し、や

がてお歸りになると身体より汗を發して参りました。

このとき醫師は

「その汗は病毒が流れ出るので舐めますから、苦

しくても御辛抱成されば、明日までには御全快いたします」。

と申して

旅宿へ歸りました。

王は翌日朝起きて見ますと、これは开も什麼に、數年以來難治の惡病にて苦しみじ病は一夜の中に全く癒り果て、元の身体と少しも違はらぬやうになりました。王の欣喜は何に譬んやうもなく手の舞ひ足の踏むを知らず、小踊りして臣下の面前に出ますと、皆々且驚き且欣び。

『陛下萬歲、王様萬歲ッ』。

と祝してゐますと、醫師藤堂はニコ／＼笑ひ顔で入り來り、

『陛下、御病氣は全快いたしましたで、ういませうも喜しく存じます』。

と云つて、鼻を天狗のやうに高くして傍に扣へました。王は

『藤堂よ、朕はこんな欣ばしいことはない。これも皆汝のお蔭である』。

と云つて厚く禮を述べ、臣下一同と大廣間で祝の酒宴を開きました。

それからと云ふものは王は醫師を愛すること非常なもので、美麗な衣服、宏壯な家屋少なからぬ金などを興へて之れを賞してゐました。

案下休題こゝに宮内大臣を勤めてゐる嫉妬心の深い人がありました。近頃醫師藤堂が王に餘り愛せらるゝのを見て、むら／＼と嫉妬の心を起しどうかして王に讒言云つて、寵愛られないやうにしたいものだと思つてあるとき王に對ひ、

『私は永い間陛下の之恩を受けまして夜書忘れる時は、ういません、就きましてはこゝに一つ大事なことが出来ましたから、御告げ申します。』

と、心配さうに差俯きますと、王は怪んで

『どんな事が出来たか疾く語れ。』



と忙しく問はれますから、小言になり

「陛下よ、陛下は藤堂をこの上なく寵愛なさるが

よくお氣を附けなさらぬと玉体は勿論この國まで

危ふくなります。と申しますのは、彼の醫師は大

悪人でありまして陛下を刺殺さうと謀つてゐま

す。」

と語りますと、王は驚きたる様子もなく

「汝は誰人より聞いたか知らぬが、彼の藤堂は決

してそんな大悪人ではない。誠の善人であつて朕

の爲めには命の親ではないか、そんな事云つて善

人を排けるのはよくない」

と諭しますと、大臣は又王に對つて

「かく仰せ給ふは御尤でありますが、それは餘り

彼れを信じ過ぎなさるからで、もう少し御考へな

されば私の言も解せられます。今陛下の玉体はこ

の上なく尊とき御身でムいまして、万一のことが有つたと致しますれば如何なさる。今醫師を殺してそれが無罪としますれば、後に至り氣の毒だといふだけで済みますが、醫師の謀反が事實となりまして玉体に若しものがあつたら取り返しが付きますまい。それでムいしますから、玉体の保護を固くする爲めに、何所の牛の骨やら馬の皮やら知れない人一人殺すのは何んでもないことでムいます。一人の貧乏醫者と万乗の君とは、丁度と瓦と玉とのやうではムいしますまいか、私は只玉体を思ふばかりにかく申上げるのでありますから、この邊はよく御考へ下さい、國家の一大事でムします。』

と言葉巧みに申しますと、王も少しは氣が變り愁然と考へてゐますと、大臣は語を續けて又云ひま

すのに

『私は命を捨てても君の爲めに悪人は殺さねば忠義が立ちません。今陛下の御心に逆ふのは済みませんが、之れも君の爲め國の爲めに申上げるのでムいしますから、何卒藤堂を殺すことを私に御任かせ下さい、若し御聞入れないと某の國の大臣が其罰を受けたると同じ方法で、私も又罰せられねばなりません。』

王はこの時大臣に對ひ

『その大臣は如何なる罰を受けたか、それを語つて見よ。』
と申しますと、大臣は次のやうなことを語り出しました。